

繪本西遊記

初編

卷十七

八遠
2500
40-1



門一遠21
號2500
卷1-40

凡士農工商之職。分家業。子固。て指用の具物を以て
今日と營む。夏世。夏一般に。然るに。近世。写本の卷中。小解り。自家
可也。種々の書入。又ハ。秋。之。賞。求。る。き。本。偶。人。感。見。其。書
男女の陰。粹。き。画。き。君。臣。父。子。の。中。や。一。面。と。赤。め。合。事
同。く。多。し。是。第。ハ。必。竟。一。時。の。興。小。繁。り。て。の。戲。ま。あ。る。併
其。職。分。れ。道。具。ハ。疵。付。り。小。ハ。解。り。著。述。拙。く。筆。者。の。誤。り
可。く。を。只。言。語。と。し。其。遇。ち。と。各。免。卷。中。の。戲。画。樂。書。詩。繪
池田屋常は是を欲然然不復得。固て素代りて諸君子所あるる爾

磨石山人識

和 漢
貸本所
東京牛込細所
誠光堂
池田屋清吉

秣陵陳元之刊西遊記序 **池清**



太史公曰。天道恢々。豈不大哉。譚言微中。
亦可以解紛。莊子曰。道在屎溺。善乎立云。
是故道惡乎往而不存。言惡乎存而不可。
若必以莊雅之云。求之。必幾乎遺。西遊一
書。不知其何人所為。或曰。出今王漢河侯
王之國。或曰。出八公之徒。或曰。出王自製。
余覽其意。近斷地得稽之。雄。危言漫衍。

言本百卷三十四編

為也。舊有叙。余讀一過。不亦著其姓氏。作者之名。豈嫌丘里之云。與。叙。以為孫。孫。以為心之神馬。以為意。弛。八。戒其所戒。八。以為肝氣之木。沙流沙。以為腎。水。三藏。神藏。藏。三藏。以為郭郭之主。魔。以為口耳鼻舌身意。恐怖顛倒幻想之障。如魔以心主。亦。以攝。是故攝心以攝魔。以還理。以

歸之太初。即心無可攝。此其以為道之成。了。如。其書直寓言者哉。彼以為大丹之數也。東生西來。如西以為紀。彼以為濁世。不可以莊語也。故委蛇以浮世。委蛇不可以為教也。如微云。以才。理道。言。不可以入俗也。故浪譎笑。虐以恣肆。笑。譎。不可以是世也。故流連。比類。以。意。於是。云。始。參差而。淋。澆。可觀。謬。悠。荒。唐。之。端。崖。澗。注。

而譚云微中。有作者之心。傲世之意。夫不可沒已。唐尤祿既購。是書奇之。益俾好事者為之行。校秩其卷。目梓之。凡二十卷。數十萬言有餘。而充叙於余。維太史漆園之喜道之所存。不欲盡廢。况中慮者哉。故聊為綴其軼叙。之不欲見志之若湮。而使後之人有覽得其意志。云也。或曰。此東野之語。非志子所志。以為史則非。信以

為子豈非倫。以云道則近。誣吾為吾子之辱。余曰。否。不然。子以吾子之史。法信耶。子之子皆偏耶。子之史皆中道邪。一不。非。信。非。倫。則。子。史。之。誣。均。也。去。此。也。非。遠。矣。何。從。而。定。之。故。以。大。道。觀。皆。非。所。宜。有。矣。以。天。地。之。大。觀。何。所。不。有。哉。故。以。彼。見。非。者。非。也。以。象。見。非。者。非。也。人。非。之。之。非。者。非。也。人。之。非。者。又。與。非。者。

也。是故必無存之後可。於是兼存焉而或
者。廼亦以為信。屬梓成。遂書冠之。
畫本西遊記刻本。近屬文金堂者。浪蕪
之梓也。遙寄書。請叙於余。以為古人
往。叙其書。而文辭皆錦繡。亦不可暨
焉。因錄舊。遂還之。

文化丙寅仲春望江戶曲亭主人書



唐太宗皇帝像



唐太宗皇帝像

鄭國公魏徵像



貞觀政成於東
土如來經啓自
西方

三島
[Red Seal]

太上老君像



魏以姓媪无
依人在勿物
皇至批錄
權子



卷之四 法言 卷之四

以孝為姓之
法言
何子於丹
哪意士一其少也
金晴

竹
大西園

佞裝三藏像



金一四法言 卷之四

可

孫悟空



即心即佛
文字西來大意
去取多事

關后



猪悟能



此心也而又悟矣
忽而與妖作怪
而降妖縛怪
向主人公

梅庵書

沙悟淨



全憑一嘴鈿
六有差
台區信何取
乎大
可

星精道人書



好箇蘇尚宜
箇源沙菜何
以為家
癩凶書

渾沌未分天地眩茫渺無人
見自從盤古破鴻濛開闢從茲
清濁辨覆載羣生仰至仁發
明萬物皆成善欲知造化會元
功須看西遊釋氏傳

升言錄

西遊釋氏傳

續像真詮唐三藏西遊全傳初套目次

江湖口本山人

譯

平安吉田武然

校

浪華大原東野

書

蓮溪石原崖庵

書

卷一甲集

第一回

靈根乃自源流出

心性脩持大道生

第二回

悟徹菩提真妙理

斷魔淨本合元宗

卷二乙集

第三回

四海名山皆拱伏

九幽十類盡除名

第四回

官封弼馬心何足

名註齊天意未寧

第五回

亂蟠桃大聖偷丹

及天宮諸神投怪

第六回

觀音赴會回原因

小聖施威降大聖

卷三丙集

第七回

八卦爐中逃大聖

五劫山下定心猿

第八回

我佛造經傳極樂

觀音奉旨上長安

第九回

陳光蕊赴任逢災

江流僧復讎救母

卷四丁集

第十回

老龍王拙計犯天條

魏丞相遺書託冥吏

第十一回

遊地府大司馬還魂

進瓜果劉全續配

卷五戊集

第十二回

唐王選僧脩大會

觀音顯像化金身

第十三回

隋虎兇金星解厄

雙叉嶺伯欽留僧

第十四回

心猿歸正

六賊無踪

卷六己集

會入西遊記目錄

第十五回

蛇盤山諸神暗佑

鷹愁洞意馬收韉

第十六回

觀音院僧謀寶貝

黑風山怪竊袈裟衣

卷七庚集

第十七回

孫行者大鬧天宮

觀世音收伏孫行者

第十八回

觀音院唐僧脫難

高老庄行者降魔

第十九回

雲梯洞悟室收八戒

浮屠山修裝受心經

第二十回

黃風嶺唐僧有難

半山中八戒爭先

卷八辛集

第二十一回

護法設莊留大聖

須彌靈吉定風魔

第二十二回

八戒大戰流沙河

本又奉法收悟淨

第二十三回

三藏不忘本

巳聖試禪心

卷九壬集

第二十四回

萬壽山大仙設宴

五枝觀世音人參

第二十五回

鎮元仙捉取經僧

孫行者大鬧五莊觀

卷十癸集

第二十六回

孫悟空三島求方

觀世音甘泉活樹

第二十七回

屍魔三戲唐僧

聖僧恨逐兇猴王

第二十八回

花果山群猴聚義

黑松林三藏逢魔

第二十九回

脫離江流束縛

義恩八戒轉山林

初快十卷至爰終三十回以下續梓行發兌有也

全部總評

西遊記一書仙佛同源之書也何以知之哉曰即以其書知之彼一百回中自取經以至正果迄首尾皆佛家之友而其中間心猿意馬本母金

公嬰兒地女交脊雙園等類又無專派任門妙
諦豈非仙佛合一者乎大抵老釋原無二道世
尊曾言過去五百世作忍辱仙人而紫陽真人
亦言如能忘機止盧即與二乘坐禪相同是言
仙不能離佛言佛不能離仙也今觀書中同卷
即言心猿求仙學道而所拜之仙乃名須菩提
祖師按須菩提為如來大弟子伴仙中初無此
名號即此可見仙即是佛業已顯然明白而仙
佛之道又總不離乎一心此心果能了悟則萬
法歸一亦萬法皆空也故未有悟能悟淨而先
有悟室所謂成佛作祖皆在此全部西遊之
大自世人未能參透此旨請勿漫讀西遊記序
文化丙寅春三月 浪世書林 森本太助識

繪本西遊記初編卷之一

靈根孕育源流出

心性修持大道生



混沌の初其狀卵の正陽氣の輕く清く上浮きて天とあり陰氣
の重濁の下凝て地と為其中に萬物とくく復生人と生し獸と
禽と生し天地人の三才と生し位を盤古氏の開辟時世界
ころれて四大部州とあり則其國の名と東勝神州 西牛賀州 南
瞻部州 北俱盧州とあり其東勝神州の海あり一つの國あり
來國とあり海の中一つの山あり華果山と号し山の上一塊の石あり
開辟以來天地の精氣を持ち仙胎とあり月日石の裂れて移り
て此の石卵と生るる化して一つの石猴とあり推眼より金盞の

上帝視
妖光知
石猿



會入西遊記卷之十一



會入西遊記卷之十一



悟空

衆猿
臨瀑
布窺
洞中



光りて遊ち上りて天より輝きふは時上聖玉帝天上の寶殿に
まうては光りて見えてあやしむは千里眼順耳風の両大将を
まめ終へは千里眼の目に千里の外と見え順耳風の
つらむる事と聞知れりから名譽の両大将はかゝる南天の
とくと見ゆしやと海報しちる東勝神州傲本國に石猴あり
金色の光りと遊ちれば猴水と飲五穀を食しは光りもやと身
いんし巻の玉帝聞は是怪とならばと打控て置れりされ石猴
漸生長し峯に遊び洞はかき築にけし麻となむれ峯月を送り
ある時猴と共に飛泉の下に遊び居るにこの猴言と出誰
はれば飛泉の水と瀆る中の形容は見る者いふおと我徒の王と
尊はと云時に石猴と云生我れと見居んと云もあはれ身と



らむと瀑布の中へお頭と見えまはる瀆の内へ却て
水かく前に織の橋あり其傍に石碣あり華果山福地水簾洞
天とよ十字峯橋と流りて行か教歩朗らつてて人家の住石
に同じ石猴見終りて再び瀑布の外に跳り出群猴はむらむら
さる依りて我輩の安居と云き究竟の處より我にまこと
瀑布の中へ来れやと多くの猴と云ひかこめて瀆の内へ
はれは衆猴も内のけりるを見て大きに悦びてよ約せしと石猴
と抱て群猴の中の王と改定に於て石猴自ら美猴王と
猿猴捕猴馬猴等の衆猴を従へ朝は花果山の遊ばし
洞中に宿し已に三百余衆と遊り一日美猴王長歎して得て
曰く我今人王とも思ふ猛獸ともいふかばとせし洞中に有て樂



石猿洞中
即猴王位



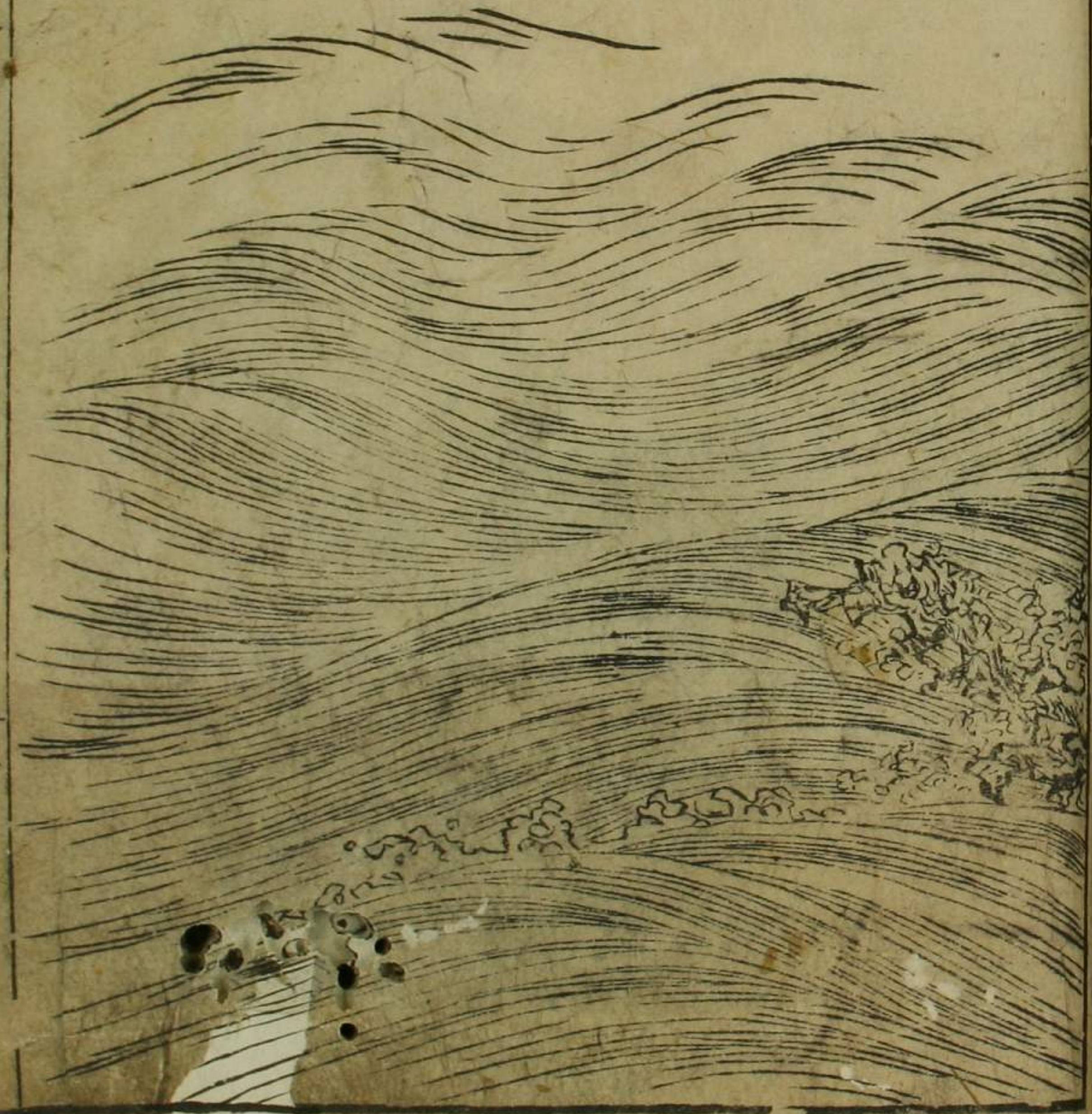
とらへも後年老血氣衰瘤王のどらわれとあり亦世界輪回の中
生れんかそかきくれまじ定と去て遠く世界の中故周流 神仙
と尋て不老長生の術と受んとて多くの猴にいとあていひ出されり
まの拈松と編一棧とは竹たきうて嵩とはせきともおらぬの波の
上を撐出らる教日東南の風は吹きく終に南瞻部品の地に着き
くろろ猴王やがて岸に上り彼方け方とまやまろくに海色の渾くこれと
見て大きに嚇ろきあふおそはるの大猴やとちりぐに逃去ると猴王返り
けく一人を食其衣裳と剝き是故着く市塵の中は今人の乳を
学ば人の詞とまら如何もして神仙とてろの長生不老の術を需人と
目お公と盡くろろかろく八九年の歳霜とて再び候にまらうて西洋海
と渡り遂に西牛賀州の地に至り山岸ふらうて歩く行く山高く峯々

是と聴い其歌の辞は曰く
観棋柯爛伐木丁々雲邊谷口徐行賣新沽酒狂笑自陶
情蒼逕秋高對月枕松根一覺天明認舊林登崖過嶺持
斧断枯藤收米成一担行歌市上易米三升更無些子爭競時
價平く不令機謀巧算没榮辱恬淡延生相逢處非仙昂
道靜座講黃庭

道靜座講黃庭
價平く不令機謀巧算没榮辱恬淡延生相逢處非仙昂
斧断枯藤收米成一担行歌市上易米三升更無些子爭競時
情蒼逕秋高對月枕松根一覺天明認舊林登崖過嶺持
觀棋柯爛伐木丁々雲邊谷口徐行賣新沽酒狂笑自陶
是と聴い其歌の辞は曰く

走りよりて是故見も一人の推ま斧を持て居り
猴王乳をましく老神仙と呼ぶ推まもましく其も睨き我ハ早き
山賤うら何由て了神仙と呼びましくと云に猴王返りて今の教と

大乗空



悟空
大乗
中
洋

悟空





悟空奪
漁父衣
入市



悟空

圃に相逢處非仙即道靜坐講黃庭と教ひあり黃庭とは
道徳の真言なり神仙あり候しといふは是れなりといふは推
これとてお答ひは教へ我作る所なりは是れ一人の神仙有
名は須菩提祖師と申はは教を我に教へ唱へしは
猴王の曰く其神仙の住む處いばんたりや推主則指さし
く是とていれは猴王大きによろこび礼をなして相別を教の如
南の方七八里あり見るに果して一庵の洞府あり洞門をく閉て交
に人語のやゆるは前に石碑ありて靈臺方寸山斜月三星洞の
十字は鶴付あり猴王もみづりに門を敲く及躡踏しとて入りて
の仙童門を開きさして出でて猴王は向ひやりたるは我師汝が門外に
とありぬい道は學ぶべし子なるをむく入ると命じしは果しとて

修行せんと候とる者れ猴王騰く礼をなして小子實に道徳と
師に聽んと候希く引て見しは後へり童子則猴王とて
俱は洞の内に入直に瑤臺の下に至れば祖師臺上は座して左右
に三十余人の仙人ならひたり猴王謹て禮をなして道は學ぶとて
祖師の曰く你何國の者かと姓名の如何猴王のよき弟子は東勝神
品傲來國花果山水簾洞の者といは名師と尋ると十余年
洋と流り界と越幸に祖師とおもふ事候得たり且又弟子姓も
名もはし又もかき母もは我奉國花果山上に居るの仙童の其
石中より産まざる祖師笑ひて你が軀まゝに掛懸にゆく候と
我你が身にまごりて姓名を定むべしとて姓を孫と悟空と
賜ふ猴王再洋して懸候後し終は洞中に留り只一心に道を

悟空到
須祖師
之門



靈臺方寸山斜月三星洞

悟空

靈臺方寸山斜月三星洞

學つてはこと成れひなる

悟徹菩提真妙理

斷魔歸本合元神

去程に孫悟空の洞の中に在て道成學び馳本を成て七年
唯長生の道を學びんと希ひて外への道と事と求り候
祖師も悟空が才智衆に秀るるをまじせ給ひ或時試み偽りて
大きに怒りをはげめに戒尺を擧て罵て曰く你う猴懸智慧此も
學び候彼もまじらば何事成さんととるやとて悟空が頭を
三下おちと背に付てまき中門を圍入る悟空は動靜の事
細ありげなる成見て其意と按じ見るに頭ととて打落へんと
の耐りも成將に走て中門ととて入り我に後門より獲

所に大それたる詔らるる道成密に傳へんと其の謎ありと
お子の刻志のひて後の門を押し果しとけ門半開とりこれにて
て身を側く門内に入り地に跪て祖師の事を待たる暫ありて
祖師眠覚め悟空と云く你夜中寝に來く何事と云か
と答めり入悟空對て師の事と云く予子の三更のめ後門より來れ
道と傳んと宣うけ故に無礼と顧はけよ未だを教と候今傍
に會て人なくは予子一人の希ふ不老長生の道と傳く
又永く師恩の深きをこそこれと云はし時祖師悟空と云く
まはせ長生の妙道成事と云く授けり入悟空謹し其に訣成事
より事ある祖師悟空に謂て曰く汝長生の妙道と云は法性頗

悟空化
大松驚
衆人



悟空



終本正述言不終一

通じるといふも却てまうこ二つの災あり是を防ぐの術ありや悟空
 答ていふそれ通陸く徳をさめり天と壽と日どうの水火既に齊
 時八百病生せ候とてさる何ゆふ二つの災の候ぞや祖師の曰ふ今
 より後五百年を経く雷災あり你が身を碎く候亦五百歳の後火
 災あり你が身を焼べしまう五百年経て風災あり你が身を吹壊る
 へ一是你が二つの災をさる悟空を聞て大さふおそれ師父烟を
 たまては三災を免れし後入をよおめて祖師悟空が身に口を付け
 七十一般の地煞變化の法を傳へ給ふ悟空一一に是を傳授し收て
 道法を練こえ三年終に雲中へ飛行せるの道を得たり祖師是を
 見し示し入你が雲中に在る花びせるは只あはれ是を雲の中を
 肥あう者あり你は勸斗雲の法を授べしとて二つの秘方を傳へ

ふふは勸斗雲の法は只一刻の間に十萬八千里を飛行せる自在
 の法されば悟空まう是を練ると數年既に功業完く備り天地の
 間におわく妙道と究め候とて一日門下の弟子等松樹の
 下にありて遊びし皆悟空にいひく云前日師父你に變化の法
 を教ふりとすり今試に身を變へて松の樹と化し我輩にせよ
 かと云ぬまも悟空いとやとて事たりと身を揺るとてさるが
 忽變じていとみの松の大本と化たりたりあまこの弟子等是を見て
 ほとお夢と上化しほろろる奇なりと稱讚する事し候
 祖師は夢と聞て門外に出く是を見れば悟空變身の法を行ひまほ
 一大松樹と化したりる祖父徒等と遠く退き悟空とまうきこ
 とくといく你衆弟子の中に於て變身して松樹と化し人皆你が

混世魔王
騷水
簾洞

西遊記卷之...



混世魔王

西遊記卷之...



其術にさうさくは必見して必ず身に求りて習ひ得んとさうは堅く修め傳へ
どへん渠必害心とさうはさうは修め傳へどへん快くは必見して
去る性命と今くせうとの後悟空是とすて両眼より泪を流し
我師父にさうれまはせ何國の所へ還りしとさうとさうと
ちうと祖父の孤廟して你何より来りしとさうとさうと
悟空忽悟り我の東勝神州傲来國華果山水蘆洞の者なりと
て遂に祖師に眼と告げ即勅斗雲にお系直に華果山に還り
来り雲より下てきて試みるる小猴どもいかに在りや只今か
たりと呼れぬ我の推ども我もこれとさうとさうと悟空が前ふれ抱いて
皆一同に中なる大王と去るの後我の洞中にかき守るといふ
と相待しはるる一人の魔王は洞と奪いしはるるは是を依て我
力を盡し防ぎ戦ふとさうとさうと却て渠に多くの子孫を捕ら
既には山も洞もさうとさうの魔王に奪れんと大王は海へく
斗りては妖魔と退きけりてと悟空がて大きに怒りて魔王は
何もの處より来りしとさうとさうの推答て曰く渠が住所は直北
に在りて是の風のり霧と踏て自ら混世魔王と名を飛来はるる
道のほらさうとさうとさうと悟空はとさうとさうと
聳とて雲上りのなり北の方へ飛りしとさうと四方を見れば峻嶺の
に物の多ありて雲を下て伺ふとさうと水窟洞あり門外に
小鬼たむれあそび居りて悟空を見て大きに怒りて我の
内へ逃入りて悟空大音に叫ぶるは你等去りてさうとは是れ
山水蘆洞の主你が家の混世魔王我眷属とあるは是れ特は

會六百五十四
一

悟空歸
洞中計
魔王

悟空



金瓶梅



悟
空
討
魔
王
安
衆
猿



系之五世魔王系一

仇と頼と早く出でて我と闘うに交下すと罵り多とかの魔王不のら
 聞て甚と憤り身に金盞鍔甲と着、大の刃とる手に握り門外へ
 まゝ生水蘆洞の主いつらな在るや来て死を快くせよと大夢一場
 山谷を動揺せり悟空口を用く呵くと笑ひ你眼をさる、唯も我がけ
 所のあるとらる事能と魔王も又大きに笑ひあるを怒や你が身は
 かへて人の満次末はく我に闘んと卵を以く大石にあらるがごとし
 こそく唯今粉のこくなく控を大刀と振て斬かふる悟空其の
 身外身の法をほろひ身内の毛一把と抜てはに含み空に向つて噴
 出せば忽三百有余小猿と化しかの魔王が身を道にしらかりかを
 面部の豆のまゝひまゝひりくところはきて只一寸も痛くせぬ悟
 空則まより魔王が刀と棄取兩段に破て捨洞の中へかけ入て着

属して成毅一盡く魔にせ取まゝ小猿等とたづね生く水洞と焼て
 再び雲中の身を投り水蘆洞をさかす

池清

書物貸本所

世界軍書翻譯書繪入讀本
 都る貸本類品澤山所持仕
 格別直造下巻と働久上巻間
 御一覽可及不々板伏る奉願上り也

東京牛込細工所拾二番地
 誠光堂
 池田清吉

凡士農工商の職分家業を固て拙用の器物を
 今日を營む其世襲一般の然るに世寫本の巻中
 可なり種々の書入又ハ秋之賞來るを本偶人感見甚
 男女の陰翳を画き君臣父子の情を西之赤め合事
 同く多し是第ハ必竟一時の録に止り七の戲を
 其職分此道具之疢舟の解を著述拙く筆者
 何をも其言語を其遇ちを名兒卷中の戲画樂書
 池田屋清吉は是を歎然不復得て固て其代りて諸君子所
 磨石の心

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

